

knowing me, knowing you 世界のアートの知の技法：

オルタナティブなアートスクール／ラーニング・プログラムのリサーチ

[小澤慶介編] レポート

2022年9月18日（日）13時30分～15時

会場 | ラーニングルーム オープンスペース

参加者 | 11名

既存の教育システムの外、オルタナティブなスペースで行われる美術教育やラーニングプログラムに携わる方々のレクチャーを通して、アートを通じた学びのあり方を学んでいくシリーズ「knowing me, knowing you 世界のアートの地の技法」。

第1回目は、インディペンデント・キュレーターであり、オルタナティブな現代アートにかかわるアートスクールを展開してきた小澤慶介さんをゲストに迎えました。

小澤さんが美術教育プログラムを考えるときに常日頃から、心に留めているいくつかのキーワードについて、具体的な事例をふまえて紹介していただき、アートについて学ぶ、アートを通して学ぶことについて考えました。

小澤さんは美術館や組織に所属しない、インディペンデント・キュレーターとして長年活動してきました。これまでの短期間のアートプロジェクトや、各地芸術祭などにも参加してきたその経験を生かし、現代アートについて学ぶことができるスペース「アートスクール」を主宰しています。そこでは、様々な場所で小澤さんが経験したことを伝え、そしてまた現場で経験をして、またそれを伝える、というサイクルが生まれていて、本で得られる知識のみを伝えるのではなく、体験や経験、またそこから得られる知恵や感覚を伝える場所になっているといいます。そうしたスクールなどで教育プログラムを考え実践していく時に、小澤さんが常に思っているいくつかの事柄があります。それらの事例を交えながら、キーワード形式で紹介していきました。

初めて見るものにどう向き合ったらいいのか

現代美術と小澤さんが初めて関わりを持ったのは、25～26年前、イギリスの大学院に通っていたときでした。1997年、ドイツのカッセルで5年に一度開催される芸術祭「ドクメンタ10」が行われていました。当時は全く知らなかったという小澤さんは、周囲につられるようにしてドクメンタを訪れます。その途中で、ベルリンに立ち寄り20世紀美術を総覧する展覧会もみず。その展覧会では教科書でみたことがあるような作品が多数出品されていて、素直に感激したといいます。一方で、ドクメンタは「ちんぷんかんぷん」。後日、大学院の先生に「20世紀美術の展覧会のほうがおもしろかった」と伝えた小澤さんに、「それは、その展覧会に知っている作品があったからでしょ」と先生からの一言が。その諭すような先生の言葉に衝撃を受けたといいます。

みたことがない作品、みたこともない状況にどう向き合うのか、その向き合う力のほうが大事だと気づきます。そんな力がどうやったら養えるのか、当時の気づきが今も小澤さんのモチベーションになっています。

いろんな人たちとわかち合うのが面白い

イギリスの大学院に通っていた小澤さんがそこで面白く感じたことは、様々な年齢、職歴、国籍、ルーツを持ったひとたちがいることでした。実社会での経験を経てから大学院に入る人が多く、移民も多く住んでいるイギリスでは、多種多様な人々が学び合う状況が生まれます。同じものをみたり、同じことについて考えても、全く違う言葉が出てくる、そういう状況が面白かったといいます。

この面白さは、小澤さんが2001年に仲間たちと立ち上げた「Arts Initiative Tokyo (AIT/エイト)」(<https://www.a-i-t.net/>)でのスクールの様子にもつながっています。現代アートを伝えるためのレクチャーは、小澤さんだけでなく、ロジャー・マクドナルドさんと共同で行いました。2人が同時に講師としてレクチャーをすることで、少しずつズレた二人の視点から語られる現代アートに触れる、という珍しいものでした。また、レクチャーだけでなく車座になったディスカッションなども行い、様々な立場の人々が意見を交わし、考えることができる場が生まれていました。

制度をうたがってみる

「AIT/エイト」(以下、エイト)ではレクチャーのほかに実践も行われました。たとえば、「美術館という制度」に対して、その対極にあるような展覧会を実施しました。「AIT HOUR MUSEUM 2002」と題されたその展覧会は、美術館が恒常的な場所であることに對し、時間限定的にし、寝転がったり飲食したり、おしゃべりを楽しんだり、通常美術館ではNGとされていることなども取り入れられました。

また、作品ごとに部屋をわけたり壁をたてたりする美術館の手法に対し、中央に設けられた鑑賞スペースを囲うように複数の作品を配置し同時に鑑賞できるようにしました。

この限定的な展覧会は、2007年の「おきなわ時間美術館」につながります。現地のNPO法人前島アートセンターと協働でおこなったこの展覧会は、沖縄の市場にある空き店舗を利用して10日間限定で開催されました。沖縄県立博物館・美術館の誕生を祝いたい、というのが発端でしたが、その外観は堅牢な城壁のようでした。それに対し、沖縄のイメージは、「おきなわ時間」といわれる独特の時間感覚が示すように、緩やかで軽いものだったと言います。

博物館・美術館の外壁にプロジェクトマップングをしたり、市場で展覧会をすることで、博物館・美術館での肩肘張ったような緊張した経験を「ほぐ

す」つもりで、もう一つの沖縄を体感できる場づくりを実施しました。

一緒にやってみる

小澤さんは普通ではみえてこない「展覧会がどうやってできているのか」を実際に体験するプログラムをいくつも実施してきました。2015年に十和田市現代美術館で小澤さんが担当した「春を待ちながら」展では、並行して連続講座をおこない、展覧会が完成するまでのプロセスを市民の人と一緒に体験し、活動していきました。

2016年にエイトを離れた小澤さんは、新たに「アート」を立ち上げます。多様なプログラムの中の一つに展覧会の企画もあります。2018年に実施したプログラム「キュレーション・プラクティス」では、予算0円という条件で、展覧会をつくることにチャレンジしました。企画、アーティストの選出、アーティストとの打ち合わせ、搬入など、展覧会をつくるプロセスを受講生とともに最初から一緒に体験していきました。

一緒に行ってみる

「一緒にやってみる」の次は、一緒に行こうということで、国内外の芸術祭や展覧会などに出かけるプログラムを実施してきました。2017年にはドイツまでドクメンタ14やミュンスター彫刻プロジェクトなどをみにいっています。20年前に小澤さんが初めて現代アートに触れたところへ、今度は現代アートを軸とした活動のなかで訪れる。小澤さん自身にどんな気づきや思いが生まれ、また参加者の人たちにとってはどんな体験になったのかも気になります。

普段みたりきいたりすることにヒントがある

「つついテレビにつっこんだりする」と言う小澤さんは、専門書などからだけではなく日常のなかで気になっていることからヒントを得ています。たとえば天気予報で使われる言葉には軍事用語が意外と多いことが気になっているそうです。

台風であれば、直撃や上陸という言葉がよく使われますし、突然の豪雨はゲリラ豪雨と呼ばれ定着しています。台風は「通過」、ゲリラ豪雨は「突然の大雨」でもいいかもしれませんが、自然現象をまるで人間に敵対するものであるかのように扱ってしまう人や社会のあり方もみえてくるようです。そこに次の展覧会や、教育プログラムのヒントが見つかりそうだと思います。

芸術を考える時、**芸術を芸術だけで考えない**ことが大事だと指摘します。

作品名や作家名、制作年といった情報だけではなく、社会や時代の状況と結びつけて考えることで、社会的あるいは哲学的に考察し思考することができます。身近なことからヒントを得る、という姿勢は、常に更新されていく社会情勢や時代の雰囲気から芸術と向き合うことを可能にする力があるようです。

小澤さんが現代アートや教育プログラムに向き合う姿勢について、具体的な事例を通して詳しく知ることができました。質疑応答では、紹介されたキーワードを反芻しながら、参加者と小澤さん、そしてモデレーターを努めたラーニングキュレーターの山本高之さんも含めた、能動的な意見のやりとりが生まれました。一方的に知識を伝え受け入れていくのではない、お互いに考えを深め広げていくラーニング（学びあい）の場が、自然と整っていたことが印象的でした。

（レポート松村淳子）